調査事項、調査内容および所感

会 派 名	そうせいと維新	氏　名	菊地　格夫、藤井　翼
調査日時	2025（令和７）年　10 月 30 日（木）　10：00　～　11：00（勝山市） 2025（令和７）年　10 月 30 日（木）　13：00　～　17：00（福井市） 2025（令和７）年　10 月 31 日（金）　13：30　～　14：30（金沢市）		
調査事項	10 月 30 日（勝山市）福井県立恐竜博物館の視察 10 月 30 日（福井市）中核市サミット 2025 in 福井 10 月 31 日（金沢市）金沢ゴーゴーカレースタジアムの視察		
調査内容	別紙記載		
所　感	別紙記載		

調査内容：

＜福井県立恐竜博物館 視察報告書＞

1．視察概要

日時：2025 年（令和 7 年）10 月 30 日（木）10 時～11 時

視察先：福井県立恐竜博物館（福井県勝山市）

目的：中核市サミット 2025 in 福井に関連して、地域資源を活用した観光振興および展示施設の運営手法について調査するため。

2．視察の経緯

中核市サミット 2025 in 福井に参加した際、主催者側が企画したエクスカーション（視察ツアー）の一つとして、福井県立恐竜博物館の視察が設定されていた。しかし、参加定員（40 名）を超える応募があり、抽選に漏れたため、個人的に現地まで足を運び、独自に視察を行った。

3．施設の概要

福井県立恐竜博物館は、世界三大恐竜博物館の一つとして知られており、福井県勝山市に位置する。館内には国内外で発掘された恐竜の骨格標本や復元模型が多数展示されており、恐竜研究の拠点としても機能している。

また、展示だけでなく、発掘現場見学や体験学習など、教育・観光の両面から地域活性化に寄与している。視察した日は平日だったがたくさんの幼稚園児、小学校低学年と思われる子どもたちが見学に来ていた。

4．視察内容と所感

実際に施設を見学したところ、展示内容・見せ方の工夫が極めて高い水準にあると感じた。特に以下の点が印象的であった。

（1）展示空間の立体的な設計

大きな恐竜化石をただ並べるのではなく、見学者が階段などを利用して上方から全体像を俯瞰

できるような導線設計がなされており、迫力と理解の両立が図られている。

展示のスケール感を最大限に活かす「見せ方」の設計が秀逸である。

(2) 徹底した観光要素の演出

館内のみならず、駅前や市街地においても恐竜をモチーフとしたモニュメントやアート、デザインが随所に配置されている。地域全体で「恐竜のまち・勝山」を演出しており、観光資源としての統一感がある。

(3) 地域の強みとブランド化

恐竜という強い観光資源を市のブランドとして確立しており、行政・住民・企業が一体となって地域イメージを形成している点は、非常に参考になった。

5. 考察

福井県勝山市は、恐竜という一つのテーマを軸に、市全体が一体的に観光・教育・産業を結びつけている。単なる観光施設としてではなく、地域アイデンティティを形成し、持続的な来訪動機を創出している点に強みがある。

秋田市においても、特定の地域資源（歴史、自然、文化など）を核としたブランド戦略を展開し、市民が誇りを持てるようなストーリー性を持たせることが重要であると感じた。単に他市を「羨ましい」と感じるのではなく、他の地域の成功事例から 「何を学び、自地域にどう生かすか」 が今後の課題である。福井県立恐竜博物館は、展示内容の充実度だけでなく、地域全体が一体となった観光戦略の成功例であり、秋田市においても、地域資源を効果的に演出し、市全体で一貫したブランディングを行うことの重要性を改めて認識した。個人的な感覚で言わせてもらうとすると、個人の満足度が非常に高く「来た甲斐があった」と思えるような観光資源の見せ方がすごいと感じた。秋田市においても、観光客に来た甲斐があったと感じてもらう何か（物理的なものなのか、精神的なものなのか）を生み出すこと（ブランディング）が大事なのだと思う。

＜中核市サミット 2025 in 福井 参加報告書＞

１．開催概要

日付：令和 7 年（2025 年）10 月 30 日(木)13 時～17 時

会場：フェニックス・プラザ（福井県福井市田原 1-13-6）

主催：中核市市長会

目的：中核市の役割・地方自治・イノベーションによる地域創生について学び、秋田市の今後の政策形成に資する知見を得ること。

概要：本サミットは「地域から新しい日本をつくる」をテーマに開催され、全国の中核市から首長・議員・関係者が一堂に会した。

第 1 部では、東京大学教授 宇野重規氏による基調講演が行われ、第 2 部では山形市・八王子市・吹田市の市長によるパネルディスカッションが実施された。基調講演では地方自治の根幹を思想史的視点から論じ、パネルでは各都市の実践的なイノベーション事例が紹介された。

２．第 1 部　基調講演

演題：「地域から新しい日本をつくる ～中核市に何ができるか～」

講師：東京大学社会科学研究所　教授　宇野重規 氏

宇野教授は政治思想史を専門とし、地方自治の理論的基礎を築いたトクヴィルの研究を通じ、民主主義と地方自治の関係を論じた。

（1）地方自治と民主主義

トクヴィルは「民主主義は地方自治こそがその基盤である」と説いた最初の思想家であり、日本の地方政治にも示唆を与える。福井県を含む地方が高い「幸福度」を誇る一方で、未来志向の希望をどう育むかが課題であると指摘。

（2）希望と挫折の関係

各自治体への調査により、「過去に挫折経験を持つ自治体ほど、今は未来への希望を持つ傾向がある」との結果を紹介。福井は戦後の災害や産業転換（繊維業の衰退）などの困難を乗り越えてきた歴史が希望につながっていると分析。

（3）人口減少と地域社会の課題

「地方消滅」レポート（増田寛也氏）から 10 年を経た今、人口減少への対応は依然として核心的課題。巨大化する東京の災害リスク、「多死社会における空き家問題（地域の 3 軒に 1 軒）」などが今後の地方行政を直撃すると警鐘。

（4）複数居住地（いわゆる二地域／多拠点居住）の一般化

一人が複数の地域と関わりを持つ「複数居住地」を一般化することが重要。現行制度では住所は 1 か所のみであり、サービス提供と負担の不均衡が生じている。住民票・税制など、制度全体の再設計が必要であると強調。

（5）所有から利用へ

空き家・空き地・放置山林・耕作放棄地などの増加は、日本社会全体の「所有地不明問題」を深刻化させている。所有権の絶対視が災害対応や再開発を妨げているとして、「所有から利用へ」という意識転換の必要性を指摘。

（6）国と地方の関係再定義

日本の自治体は「自前主義」に陥っている。共通の行政プラットフォームの上で地域の個性を発揮すべきであり、デジタル技術の活用がその鍵になる。

（7）DX とデザイン思考

DX の本質は「行政をユーザー中心に変革すること」。デザイン思考とは、美的感覚ではなく、人間中心・使い勝手中心の課題解決の方法論であると解説。

（8）DECIDIM（デシディム）

スペイン・バルセロナで開発された市民参加型オンラインプラットフォーム。住民がオンライン上で意見を交わし、地域課題の解決を図る仕組み。加古川市・渋谷区で導入が始まっている。「デジタル空間で自治を進める」という新しい自治の形として注目される。

（9）中核市の新たな役割

国土審議会の議論では、「地域生活圏」を支える核として中核市が重要としている。官民連携による地域経営、地産地消型エネルギー、社会的利益を追求するゼブラ企業（白と黒のシマウマ＝ゼブラが、「企業利益（黒）＋社会貢献・共存（白）」という一見相反する要素を統合している姿にたとえられている企業のこと）の活用などが鍵とされた。これらはすべて「地域の希望」と「幸福度の向上」に結びつくと結論づけた。

３．第 2 部　パネルディスカッション

テーマ：「元気×イノベーション～未来を創る地域づくり～」

登壇者：山形市 佐藤孝弘 市長、八王子市 初宿和夫 市長、吹田市 後藤圭二 市長
進行：南保勝 氏（仁愛大学特任教授）
コメント：嶋田浩昌 氏（福井商工会議所専務理事）

（1）山形市：文化と創造による再生

廃校となった旧第一小学校をリノベーションし「やまがたクリエイティブシティセンターQ1」を整備。本屋やカフェなど個性あるテナントが 1 階に入居し、公民連携による文化拠点となっている。東北芸術工科大馬場正尊教授というキーマンの存在がこの事業の成功の秘訣と言っても過言ではない。市長から馬場教授への助言「最初はテナントが半分でもよい。後から進化していく施設がよい」が馬場教授の肩の力を抜いたとされる。完璧を目指さず、進化型の公共施設運営の重要性を示す好例。

（2）八王子市：シルバー人材と大学連携による新市場開拓

「良いものを作れば売れる」から「売れるものを作る」への転換（マーケットイン思考）。高齢者や大学との共創により新しい市場を創出。SWOT 分析による課題認識を基礎とし、産学連携で地域資源を活用している。

（3）吹田市：北大阪健康医療都市（健都）によるエリア価値向上

非課税施設（医療・研究機関）を集積し、固定資産税収の増加を実現。施設単体でなく「エリア全体の価値」を上げる方針を採用。医療経営の課題や人口密集地での持続可能な医療体制についても率直な見解を述べた。

（4）総括

三市に共通するのは「固定概念を壊し、新たな組み合わせで価値を創造する姿勢」。コーディネーターの南保氏は、イノベーション理論（シュンペーター）を引用し、「地方創生は想像的破壊の連鎖によって進む」と結んだ。

4. 所感

今回の中核市サミットでは、理論（宇野教授の講演）と実践（3 市の事例）の双方から、地方自治の未来像が提示され、非常に勉強になった。中核市は単なる行政単位ではなく、「地域生活圏の核」として、民間・大学・住民をつなぐハブ機能を果たすことが求められる。

秋田市としても、人口減少や財政制約の中でこそ、創造的破壊＝イノベーションによる再構築を進める必要があると感じた。完璧を目指さず、進化型の公共施設運営の重要性や、非課税施設（医療・研究機関）を集積し、固定資産税収の増加の実現など秋田市でも可能な学びが多かった。

また、国の方針として複数居住地（いわゆる二地域／多拠点居住）の一般化や自前主義に陥っている地方都市が共通の行政プラットフォームを使用するなど、国と地方の関係性の再定義や地方創生を考える上で中核市による国への提言の重要性も感じた。

地域の幸福度や希望は、行政サービスの拡充ではなく、「失敗や挫折を越えて再構築する地域力」から生まれること、ゼブラ企業を中心とした企業誘致や（税制等の整備はさておき）複数居住地の推進など、秋田市における地方自治・イノベーションによる地域創生への新しい視点が得られた良いサミットだったと感じた。新しい潮流を現実的に取り入れ、市民が希望を持ち続けられるまちづくりに繋げたいと思う。

＜金沢ゴーゴーカレースタジアム 視察報告書＞

1. 視察の概要

日時：2025 年（令和 7 年）10 月 31 日（金）13 時 30 分～14 時 30 分

視察先：金沢ゴーゴーカレースタジアム（石川県金沢市）

説明者：ツエーゲン金沢 スタジアム管理担当 東川昌典氏

目的：地域スポーツ施設の運営体制、指定管理方式、及びスタジアム建設・設計上の工夫について学ぶため

2. 視察の経緯

秋田市では現在、J2 リーグに所属する「ブラウブリッツ秋田」のホームスタジアム整備をめぐり、現 ASP スタジアム（秋田市所有）の改修案と、同じ八橋運動公園地区における新築案の両方が検討されている。新築案では総事業費 170 億円規模と試算されており、財政負担や実現可能性について市内で議論が続いている。

このような状況を踏まえ、ほぼ同規模（約 1 万人収容）のスタジアムとして約 2 年前に整備された金沢ゴーゴーカレースタジアムを視察し、施設構造・屋根設計・運営体制・地域連携などの実際を学ぶ目的で現地調査を実施した。

3. 施設の概要

金沢ゴーゴーカレースタジアムは、J3 リーグクラブ「ツエーゲン金沢」のホームとして建設されたサッカー専用スタジアムである。建設費はおおよそ約 90 億円（2023 年頃完成）とされており、ネーミングライツによって地域企業「ゴーゴーカレーグループ」との協働が行われている。

スタジアムは観客収容約 1 万人、サッカー専用の設計で、ピッチと観客席の距離が非常に近く、臨場感のある観戦環境を実現している。観客席の屋根は三方向のスタンドにのみ設置され、スタジアム内部には自然採光と通風を意識した空間構造が採用されている。

4. 説明および視察内容

説明者である東川氏から、以下のような具体的な説明があった。

・指定管理方式の運用

行政が施設を整備し、ツエーゲン金沢が主体的に運営を行う。クラブ運営会社が地域企業と連携し、イベント開催や収益確保を図っている。

・地域との連携・ブランド戦略

ネーミングライツ企業と地域経済を結びつけることで、スタジアムが地域ブランドの発信拠点となっている。駅前や市街地でもチームロゴを見かけ、地域一体型のシンボル化が進んでいると感じる。ただし、スタジアム自体は金沢市の施設であるため、フィールドの賃借料が J リーグ基準のフィールドではあり得ないくらい安い料金体系になっているとのこと。しかし芝の保護のため、1 チームの使用時間に制限があり 3 時間が最大とのことで、市民によって頻繁に使われることにはならない設定は存在した。

・設計上の特徴と課題

屋根を 3 方向にのみ設置しており、風通しや採光の面では利点がある一方、屋根と屋根の間の隙間から雨風が入り込む構造である。また、屋根によって一部のピッチが日照不足となり、芝の養生が不十分になる箇所が発生しているとの説明があった。

・多面的な活用

防災拠点としての多面的活用を視野に入れた整備がなされており、防災時に必要な物資の備蓄倉庫としての役割を担う整備方針がある。

5. 所感及び考察

金沢ゴーゴーカレースタジアムの設計・運営は、秋田市におけるスタジアム整備検討において非常に示唆的であった。というのも、金沢のスタジアムは梓設計という会社が手掛けており、秋田市のスタジアムの調査・コンサルティングも同じ会社に依頼して行っているため、視察からどのようなスタジアムを目指すのかのイメージを持ちやすかった。

まず、同規模（約 1 万人）で建設費約 90 億円という事例は、秋田市が現在見積もっている新築約 170 億円という数値と比較して、建設時期・資材価格・人件費の高騰によるコスト上昇がこの 2 年間でどれほど影響しているかを具体的に考察する材料となった。（ほぼ倍になっている）

金沢のスタジアムは、一部の屋根と壁に空間を作り風が通る設計になっており、3 方向の屋根は繋がっていないスタイルだが、秋田市は年間を通じての強風と冬季の積雪の影響を受けやすく、金沢のような構造は気候的に適さないと感じた。一方で、全面を覆う屋根を設ければ日照不足による芝生管理の困難さが増すため、屋根構造と芝管理の両立は、北日本特有の課題として検討すべき重要な点である。

担当の東川さんからの説明で一番面白かったというか興味深かったのは、金沢のスタジアムは「おもてなしのスタジアム」と謳っておりパンフレットにも明記されているが、対戦相手の応援団がメインで入るアウェーホームゴール裏の北サイドスタンドは奥行きが 5m程度しかなく極めて小規模なサイズのスペースであり、屋根もない（将来的には、北スタンドとバックスタンドの改修によって、J1250 規定を満たす増設が可能性のある状態のままになっている）が、このことは金沢のスタイルである「おもてなし」とは恥ずかしくて言えない、という言葉である。行政が作る施設というのは、財源との兼ね合いでこのような中途半端な状態になる可能性を秘めている。

また、秋田市においても、単なる「サッカー専用スタジアム」ではなく、地域交流・観光振興・防災拠点としての多面的活用を視野に入れた整備方針が求められる。金沢ではコンコースの一般市民向けの開放や利用に関しては一切行われておらず、秋田市では施設を通した地域交流・観光振興をきちんと考える必要があると感じた。

福井県立恐竜博物館

福井県立恐竜博物館の外観　モニュメントが目を引く作りとなっている。

入口を入るとエスカレーターで地下に下っていくため、過去の世界へ入り込むような形となっており、没入感を演出している。また、大き化石は同じ水準では全体が見えないため、階段等で上から見えるような工夫が随所にある。

化石だけだと飽きてしまうであろうメインの展示スペースは、大きな恐竜のロボットがセンサー等で観客の位置に反応して動いており、目を引くような展示になっている。他には大きな LED パネルで恐竜がいた時代の様子を CG で流したり螺旋状に上から見られる通路があったりと、様々な方法や角度で観察しイメージを持つことができる工夫がある。

中核市サミット 2025 in 福井

中核市サミットが開催された福井市のフェニックス・プラザの外観の様子。

メイン会場の様子。ここでは基調講演、パネルディスカッションなどが行われた。

分科会の会場の様子（第 3 分科会）。ここではパネルディスカッションが行われた。

金沢ゴーゴーカレースタジアム

金沢ゴーゴーカレースタジアムの様子。写真左がメインスタンドを背にしたバックスタンド側の眺望。ピッチは天然芝で、スタンドの席はチームカラーの赤。スタンドには KANAZAWA の文字が映える。写真右は、担当の東川さんから話を聞いている様子。背景はメインスタンドの VIP 席が見えている。

南サイドスタンドの様子。設計者は、この形がアイコンとなり、さらに応援の音を反響させてピッチによりよく聞こえるように設計したとされている。風が抜ける形でメイン・バックスタンドとは屋根が繋がっていない。

北サイドスタンドの様子。モニターの台座部分に県産木材を使っている。将来拡張することを前提に非常に狭い造りとなっている。

VIP ラウンジと VIP 用のシートの様子。ラウンジはガラス張りの室内で、空調の効いたところから観戦できる。スタンド側の VIP 用シートは、クッションが厚く他のシートと差がある。